論文要旨

遊牧式生産方式の展開に関する実証研究

中国新疆のカザフ族牧民を対象として

氏名：越川祐斗（経済学部三年）

指導教員：大西広先生

１、　はじめに

遊牧式生産方式は、世界中に分布するがあまり積極的な評価がされているとは言えない。事実として過放牧など様々な問題に直面しているがその責を遊牧に負わせるのみではそれらの問題は解決せず、解決のためにもその展開の論理を解明する必要がある。本論では経済学的な視点から明らかにするため中国新疆のカザフ族牧民を対象として、特に生産において重要な役割を果たす基礎的活動単位の「アウル」を対象として分析をした。アウルの規模は1948年から一貫して縮小していることが観察された。その背景として同じように一貫して観察された、人口と家畜頭数の増加による草原の過密化が考えられる。

草原の過密化によって自然資源の効率的な利用の重要性が増す、その時に経営規模が小さい方が効率的であるなら経営規模は縮小する。それらを実証するために遊牧式生産が収穫逓減であるか調べた。

２、　方法

先行研究のデータを用いて 1993 年の北新疆アルタイ地区の一遊牧村の生産関数推計と 2005 年の北新疆の 5 つの定住牧民の村の利益に世帯規模を説明関数として単回帰分析を行った。

３、　結果

生産関数推計は、推計したコブダグラス型生産関数の生産要素の係数を足し合わせても 0.5 ほどであることから規模に対して収穫逓減であることが分かった。単回帰分析は、平均的な利益水準までは世帯規模が小さい方が稼げて、平均以上は、その他の収入を持っている場合が多く世帯規模が大きいほど稼げる傾向が分かった。つまり、農牧業のみの収入を考えると世帯規模が小さい方が稼げるため、こちらも規模に対して収穫逓減であることが分かった。

４、　考察

1993 年と 2005 年の新疆の遊牧式生産が規模に対して収穫逓減であることが実証された。これにより、人口と家畜頭数の増加が増加し草原が過密状態である新疆の場合、経営規模を縮小する現象が合理的な選択の結果であることが実証された。これにより遊牧式生産方式の経営規模と収穫の関係という展開の論理の一部が明らかになった。